東山金子彌平と「日蓮主義」の時代（一）

――國柱會初代京都局長・金子彌平

金子（かねこ） 宗徳（むねのり）

國柱會京都局開設

田中智學は、明治一七（一八八四）年一月に立正安國会を結成して以来、在家信者を中心とする「日蓮主義」運動を精力的に展開した。教学や行軌が整備されると共に、各地に門下団体が発足し、教線は次第に拡大していく。

教団の充実を目指す智學は、大正三（一九一四）年一一月三日、明治大帝の御生誕日を期し、國柱會を設立する。それに対応すべく、各地の門下団体も國柱會の地方組織（支局）に編成し直された。翌年末までに、北は北海道の小樽から南は九州の熊本、さらには海を越えて京城や大連など合はせて六三局が開設されたといふ（大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』）。

大正四（一九一五）年三月二二日、春期皇霊祭に合はせ、國柱會京都局の開設披露会が行はれた。『國柱新聞』（大正四年四月二一日）の記事をもとに、当日の様子を再現してみよう。

当日は生憎の雨天にもかかはらず、京都局が置かれた戸田利作の新居に会員達は続々と集まつて来た。大陸布教に専心してゐた講師の伊東智靈の姿も見える。午後三時、参列者一同は桃山に出発し、明治天皇及び昭憲皇太后の御陵に参拝した。局に帰着後、春期皇霊祭法要並びに故会員追悼法要が行はれ、引き続き、水

無瀬裕次が「國柱會創始の宣言」を朗読する。

吾人は茲に多年の信行的經驗に據り時世の適應に鑑みて、世出両聖弘宣の大猷を光揚せんが爲め、同志と共に國柱會を結成することを宣言す。

國柱會とは、專ら國聖日蓮大士の解決唱導に基きて、日本建國の元意たる道義的世界統一の洪猷を發揮して、一大正義の下に四海の歸一を早め、用て世界の最終光明、人類の究竟救濟を實現するに努むるを以て主義と爲し、之を研究し、之を體現し、之を遂行するを以て事業と爲す。（後略）

国柱会京都局

そして、局員を代表して金子彌平が「国柱會京都局開設披露之辭」を述べ、一同の決意を示した。

我ガ恩師田中大先生閣下累年ノ大獅子吼大慈教ノ下ニ熱烈甚深ノ信仰ヲ以テ正法ニ歸依シ且ツ其弘通ニ努力シ來リタル吾ガ京都ニ於ケル立正安國會誌友會及ビ養正會ノ三團結會衆ハ茲ニ恭シク大先生閣下ノ御教令ヲ奉ジ一同國柱會ニ合體スルノ機運ニ際會セリ抑モ大先生閣下ノ今回國柱會ヲ興シ我ガ日本人全國及ビ海外異域ニ散在スル種々名稱ヲ異ニスル正法信仰上ノ各團體ヲ悉皆之レニ合體セシメ、一名稱即チ國柱會ノ名稱ノ下ニ會衆ヲシテ益々勇猛精進シテ正法ノ信行ニ努力セシメントセラル、ノ御洪圖ハ我等ノ深ク感激奉體シテ不惜身命以テ累年ノ大慈教ト大恩光ニ酬ヒ奉ラント欲スル所ナリ、且ハ今日大先生閣下數十年來ノ大獅子吼ノ法益空シカラズ宇内ノ形勢ハ益々我ガ正法弘通ノ機運ヲ促シ來レリ。我ガ會衆モ亦更ニ一層ノ努力ヲ致シテ我ガ恩師國柱會唯

一重大ノ目的タル一天四海皆歸妙法ノ聖業ニ従事セザルベカラズ、今日茲ニ國柱會京都局開設ニ際シ會衆一同前途多大ノ希望ヲ以テ躍然歓喜ニ堪エズ、コレヲ以テ開設ノ辭トナス、

さらに、伊東智靈・明川南疇・戸田利作の祝辞、佐藤捨三郎・水無瀬裕次の感想告白が続いた。

その後、懇親会へと移り、藤井淺七による万歳節の替歌、明川儀兵衛による祝歌、明川宇寅による大津絵節の替歌など余興が行はれ、盛会の裡に幕を閉ぢた。

京都局員を代表して「開設披露之辭」を述べた金子彌平（六〇歳）は、初代局長として「日蓮主義」運動に挺身する。本稿では、彌平の活動を振り返りつ、、「日蓮主義の黄金時代」（戸頃重基『近代社会と日蓮主義』）とも称される時代の一断面を描きたい。

金子彌平の前半生

金子彌平は、安政元（一八五四）年の暮れも押し迫つた一二月二五日、金兵衛・ツネ夫妻の長男として、盛岡藩・花巻城下で呱々の声を上げた。なほ、金子家は「糸屋」といふ屋号を持ち、近在に広大な地所を有する有数の商家であつたけれども、跡継ぎが居らず、彌右衛門の長女であるツネに婿を取り、家業を継がせてゐた。

慶應三（一八六七）年一〇月一四日、徳川慶喜が大政奉還を行ひ、同年一二月九日には王政復古の大号令が発せられ、薩長中心の新政府が成立する。旧幕府方の勢力を削がんとして、新政府は鳥羽・伏見の戦ひを引き起こし、戊辰戦争が勃発した。その際、新政府の強硬姿勢に反発した奥羽・越後の諸藩は奥羽越列藩同盟を締約し、輪王寺宮公現法親王（後の北白川宮能久親王）を盟主に頂く。盛岡藩も、東政圖（南部次郎）などの異論を抑へて同盟に参加し、新政府側に寝返つた西隣の秋田藩に攻め込み、会津藩などの降伏後も敢闘したが、最終的には降伏のやむなきに至つた。

「朝敵」となつた東北諸藩に対する新政府の処断はあまりに苛烈であつた。その際たるものは改易された会津藩だが、盛岡藩もまた藩主の隠退謹慎、盛岡（二〇万石）から白石（一三万石）への転封など、厳しい処分を受けた（翌年、東の奔走により旧領復帰を許される）。何はともあれ、「白河以北一山百文」と蔑まれた東北出身者は、逆境から出発せねばならなかつた。

東山金子彌平

しかし、彌平は怯まなかつた。明治四（一八七一）年、数へ一八歳で単身上京して、郷党の大先輩である東――当時、盛岡藩大参事（同年七月の廃藩置県後は盛岡県大参事）を務めてゐた――のもとに寄宿し、照井小作について皇漢の学を修めた。翌年冬には、福澤諭吉の門を叩き、福澤家に寄寓しつ、、慶應義塾で学び始めた。沈思黙考することを好んだ彌平の学業成績は優秀であり、後の首相・原敬と共に「盛岡三秀才」の誉れ高かつたといふ（なほ、「三秀才」の残る一名は不明）。

早くから東洋と西洋の統一を志してゐたといふ彌平は、明治八（一八七五）年に慶應義塾を卒業すると鹿児島へ赴き、西郷隆盛らに面会して所信を吐露したといふ。西郷からは時期尚早と諭されたらしいが、青年の滾る血は雄飛を求め、帰京後の翌年七月に「公使館在勤通弁見習」として清国に渡り、各地を旅行したり清国人と交はるなどして、現地の事情を深く知らうとした。明治一二（一八七九）年六月には、清国の革命を目指す東が渡清して来る。東と彌平、さらには駐清公使・森有礼の甥である伊集院兼良の三名は義兄弟の役を結び、彌平と兼良は同志を集めて蒙古に潜入したといふ。

明治一二（一八七八）年末に帰国した彌平は、翌年二月に旧知の海軍軍人・曽根俊虎らと本邦初のアジア主義団体・興亞會を結成し、幹事となつた。因みに、初代会長は長岡護美（子爵・旧熊本藩主細川慶順の六弟）、同じく副会長は渡邊洪基（外交官・のち帝国大学初代総長）である。

「欧米列強に侮られないためにはアジア諸国が連帯せねばならぬ。そのためには、政府間外交だけに頼るのでなく、民間志士たちの意思疎通を密にする必要がある。」――このやうな主張を持つ同会は、朝野の幅

広い支持を得るだけでなく、支那や朝鮮、さらにはペルシャやトルコからの入会者もあり、発足から半年足らずで会員数は二七〇名を数へた。

興亞會は様々な活動を展開したが、特筆すべきは明治一三（一八八〇）年二月に興亞會支那語学校を開設したことである。支那語に堪能な彌平は、同校で講義を行ふと共に母校の慶應義塾に新設された支那語科でも教鞭を執つた。

興亞會は『興亞會報告』といふ機関誌を発行してをり、会員は自己の見解を発表することが出来た。同誌の第三集（明治一三年四月二一日）に掲載された「日本條下論説」において、「制度文物」に比べ「兵備貿易」に対する関心が低い状況を嘆く彌平は、露英米のアジア侵出を語り、「我邦ノ勇進シテ爲ス有ラバ、全彊胥依頼スル所ヲ得テ、全彊已ニ安ンジテ、大洲コレ振興セン」と、アジアにおける日本の指導的役割を謳ひ上げてゐる。また、明治一四（一八八一）年一二月には、米人宣教師W・S・ウェルスの著書を抄訳し、『支那總説』を刊行した。なほ、同書は、「維新後我が國に於ける支那に關する著述の嚆矢の一」（『対支回顧録』）、「当時に於いては支那研究の資料として甚だ注目すべきもの」（『東亞先覺志士記傳』）といふ評価が与へられてゐる。

興亜論とは直接的には関係しないが、彌平は陸奥湾を擁する青森県の下北半島付近に遷都すべきと考へてゐた。とりわけ、「大湊は軍港たるに適して小湊は通商市場たる可し」（『國會』明治二五年一二月二〇日）と判断した彌平は、四弟・友之助（筆者の曾祖父）と共に小湊海岸（現・青森県東津軽郡平内町）の埋立築港を企図したが、実現しなかつた（余談になるが、大東亜戦争中まで同地に金子家の所有地があり、祖母や父の疎開先となつた）。とは云へ、大湊には明治三五（一九〇二）年八月一日に海軍水雷部が設置され、現在でも海上自衛隊の基地が置かれるなど、北日本における海上防衛の根拠地となつてをり、構想は一定の現実性を有してゐたと云へるだらう。

明治一五（一八八二）年七月、彌平は大蔵省准奏任御用掛を命ぜられ、銀行局に配属された。さらに、大蔵卿・松方正義の知遇を得た彌平は国債局に異動し、明治一七（一八八四）年五月末から明くる明治一八（一八八五）年一〇月まで、アメリカへの出張を命ぜられた。

帰国後、主税局酒税課勤務となり、正七位に叙せられた彌平は、宇佐美延枝を妻に迎へる。延枝は、東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）出身の才媛であつた。

着実に昇進した上に、良き伴侶まで得て、生活は順調に進むかと思はれたが、彌平は壁に直面してゐた。興亞會の後身、亞細亞協會は存続してゐた――最終的には、明治三三（一八九〇）年一月に東亞同文会と合併する――が、朝鮮をめぐり日清両国が対立してゐたゝめに、思ふような活動が出来なくなつてゐた。思ひあまつた彌平は官吏の職を退き、表立つた活動から退いてしまふ。

明治二七（一八九四）年七月に日清戦争が勃発すると、支那に関する豊富な知識を買はれてか、遼寧省・営口の占領行政に携はつた。その後、明治二九（一八九六）年四月には台湾総督府民政局事務官となり、国語伝習所長心得などを歴任、乃木希典総督を助けたと伝へられる。

明治三一（一八九八）年一月、台湾総督府を辞した彌平は実業界に転身する。大阪に移住した彌平は、牛荘（営口）で金福洋行といふ貿易会社を興し、日本からは綿布や雑貨を輸出し、満州からは大豆などを輸入して少なからぬ利益を得たが、義和団の暴動やロシア軍の満州占領により、二万円ほどの損害を蒙つたこともあつたといふ。

明治三七（一九〇四）年二月に日露戦争が勃発すると、彌平は事業の本拠を安東に移した。同地は朝鮮半島北部の新義州と鴨緑江を挟んで向かい合ふ要衝で、現在は丹東と呼ばれてゐる。軍内の縁故をたどつて木材事業を展開する傍ら、安東県市政準備委員長として新市街計画を建てるなどしたといふ。機会があれば訪ねてみたいものである。

加へて、幾つかの鉱山とも関はりを持つなど事業は順調で、京都の御幸町竹屋町上ルに新築された邸宅は敷地四〇〇坪といふ広大なものであつた。そこから大文字山など東山三六峰を望むことができたのであらうか、「東山」と号してゐる。

以上が、彌平が智學に出会ふまでの歩みである。より詳しく知りたい方は、『明治聖德記念學會紀要』（復刻第四二号）所収の拙稿「金子彌平――ある明治人の軌跡」を参照して頂きたい。

（姫路獨協大学講師）

東山金子彌平と「日蓮主義」の時代（二）

――「日蓮主義」との出会ひ

金子（かねこ） 宗徳（むねのり）

彌平の宗教的環境

彌平は智学の名を以前から知つてゐたやうだが、その主張に初めて触れたのは、明治四〇（一九〇七）年四月中旬のことである。福島嘉兵衛の熱心な薦めにより、智学の著書『宗門之維新』と立正安国会の機関誌『妙宗』を手に取つた彌平は、智学が有する「御理想御抱負御計畫の深遠雄大なる」ことを知つた（同年五月二三日付智学宛彌平書翰／「信念の聲」といふタイトルを付され『妙宗』第一〇巻七号に収録――今回に限り、特段の断りなき場合は同書翰からの引用）。

それまで、彌平は日蓮主義と全く縁がなかつた。

もともと金子家は浄土宗の門徒であり、宮沢賢治の生家近くに建つ松庵寺を菩提寺とする。同寺は、初代花巻城主・北松斎（信愛）から「松」の寺を許された城下の名刹であつた。度重なる饑饉に際しては、施粥を行ふだけでなく、餓死者を埋葬し、境内に供養塔を建立したといふ（『いわてのお寺さん［北上・花巻とその周辺］』）。彌平自身は饑饉に遭遇してはゐないが、当時の話を繰り返し聞かされたことであらう。

その後、上京した彌平は、前回も述べたやうに、まず照井小作から和漢の古典を学んだ後、福澤諭吉の慶應義塾で洋学の教育を受けた。『荘子解』といふ著作を持つ照井はともかく、福澤は「宗教の外に逍遙」（『通俗国権論』）し、次のやうな意見を持つてゐた。

凡そ道徳の手引きとなる可きものなれば、佛法にても神道にても、金比羅様にても稲荷様にても、人民の智識の度に従て其教を守て可なり。モラルスタンドアルトは人の地位に由て幾十百段もある可し。次第に其地位を移して上の方に進み、稲荷様の信向を止めて佛法を信じ、又これを止めて今の耶蘇を信じ、又これに疑を容れてウーチリタリスム（Utilitarianism／功利主義――引用者補足）などを考へ、追々に惑溺を少なくするを得ば御目出度し。結局宗教は人間に必ず存して必ず滅ぼす可らざるものなり。其要は之を改進せしむるに在るのみ。（『覺書』）

「宗教的信仰を全くもたずに、宗教を外側から眺めてその功利性を考え、宗教行事を彼自身も守ることが社会的功利性に貢献するという視点」（小泉仰『福澤諭吉の宗教観』）に立つ福澤は、土俗的な信仰に対しては極めて否定的だつた――『福翁自伝』には、神札や稲荷の御神体を邪険に扱つたエピソードが存在する。その一方で、キリスト教の宣教師が教育者として優れてゐることに着目し、慶應義塾の教員として積極的に受け容れたといふ。

ところで、福澤ら当時の啓蒙主義的知識人は明治六（一八七三）年に明六社を結成するが、森有礼・中村正直（敬宇）などはキリスト教を積極的に受け容れてゐた。因みに、この両者は彌平とも関係が深い。

鹿児島藩からの留学生として英国に留学した森は、同地でキリスト教神秘主義（スウェーデンボルグ派）の流れを汲む米国の宗教家ハリスに傾倒し、彼が主宰する共同農場のメンバーとなるべく渡米したほどであつた。明治二（一八六八）年に帰国して外交官となつた森は、明治八（一八七五）年一一月に駐清公使の命を受ける。

翌年五月に一時帰国した森の知遇を得た彌平は、帰任する森に随行して渡清し、（前回も記した通り）様々な活動を行つたらしい。なほ、森のアルバムには、若き彌平の写真（裏面に「明治一三年四月一二日・金子弥兵衛」との添書あり）が残されてゐる（犬塚孝明・石黒敬章『明治の若き群像森有礼旧蔵アルバム』）。

また、昌平坂学問所の儒官であつた中村は、幕府の留学生監督官として英国に滞在した経験を持つ。早く

からキリスト教に関心を持つてゐた中村は、明治七（一八七四）年のクリスマスにメソヂスト派宣教師カックランから洗礼を受けた。それと同時に、中村はスマイルズの『自助論』を翻訳し、『西国立志編』として刊行したことでも知られる。「みずから助くる人民多ければ、その邦國必ず元気充実し、精神強盛なること」を論じた同書は、福澤諭吉の『学問のすゝめ』と並ぶ大ベストセラーとなつた。

彌平が中村の知遇を得た時期は定かではないが、明治一四（一八八一）年一二月に彌平の訳で刊行された『支那總説』に、中村は序文を寄せてゐる。また、彌平の妻となつた宇佐美延枝は、中村が摂理（校長）を務めてゐた東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）の卒業生であり、両者の縁談に際して何らかの役割を果たしたのではなからうか。

中村のやうな改宗者は多くなかつたが、キリスト教の社会的影響力には見逃せないものがあつた。寺社の内側に閉ぢこもつた僧侶や神職と異なり、キリスト者たちは（欧米からの援助があつたにせよ）学校経営や救貧事業を積極的に行つたからである。そのうち何人かは、実業家に転身した彌平と関はりを持つた。

現存する数少ない彌平宛書翰の中に、押川方義からの来翰（明治四〇年一二月一八日）が存在する。彌平が所有してゐた真木鉱山――秋田県仙北郡長信田村（現・大仙市）――の共同経営に関するものだ。二人は、北清事変の余燼さめやらぬ北京で顔を合わせて以来の付き合ひであつた。

彌平より二歳年長で伊予松山藩出身の押川方義は、横浜英学校でカルヴァン派の米人宣教師ヘボン（ヘボン式ローマ字の発明者）に学ぶうち、キリスト教に心惹かれて同志らと横浜バンドを結成した人物として知られる（『海底軍艦』など冒険小説で知られる押川春浪は方義の長男）。米人宣教師ホーイと共に仙台神学校（後に東北学院となる）を開設した方義は、国士的キリスト者ともいふべき人物であり、明治四〇（一九〇七）年に松村介石が日本独自のキリスト教を目指して日本教会（後にキリストの神性を否定し、二年後に道会と改称）を設立すると、会友として積極的に活動を支援した。同会の会員であつた大川周明は、「私は…押川先生に於て真個の信神者を…見た。」（『安楽の門』）と後に評してゐる。

彌平宛書翰の中には、日本救世軍の実質的創設者として知られる山室軍平からの来翰も存在する（明治四四年二月一〇日）。

「社会鍋」で知られる救世軍は、メソヂスト派の英人牧師ブースとその妻によつて、ロンドンで創設された。貧しい労働者階級を布教対象とした救世軍は、世界規模で社会福祉事業を展開した。明治二八（一八九五）年、来日したライトら一四名に加へ、同志社出身の軍平などが加はり活動を開始する。とりわけ、廃娼運動に力を注いだ。

明治三二（一八九九）年六月、軍平は佐藤機恵子と結婚する。機恵子が花巻の出身だつた関係で彌平も結婚式に招待され、軍平と知り合つた。大正五（一九一六）年七月に機恵子は歿したが、付き合ひは継続し、彌平の死を悼む軍平の遺族宛書翰が残つてゐる（大正一三年三月一日）。なほ、機恵子の兄である皐蔵は、第一次世界大戦に際して地中海に派遣された第二特務艦隊の司令官であり、中将で予備役となつた後には、本多日生を中心とする統一団で講演を行つたこともあつた（大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』）。

謹三と智学

彌平には、（筆者の曾祖父である友之助を含めて）弟が六人いたが、この中からもキリスト者が出た。友之助の次弟にあたる（彌平からは五弟にあたる）謹三は、小学生時代から成績優等で、長じて彌平と同じ慶應義塾に学んでゐる。英語力を磨かうとした謹三は、兌換紙幣発行準備のために出張（当時、彌平は大蔵省銀行局勤務）する彌平と共に、明治一七（一八八四）年五月に横浜港を発ち米国に向かつた。

米国東部ペンシルヴァニア州ランカスターのフランクリン・アンド・マーシャル大学附属アカデミー（日本風に云へば高校）に留学した謹三は、（後に押川の同志となる）ホーイから英語聖書の講義を受けた。やがて、洗礼を受けた謹三は、明治一八（一八九五）年一〇月に彌平が米国を発つた後も米国に留まり、同大学の本科ならびに神学校を卒業し、明治二七（一八九四）年には宣教師としての資格を得る。その時点で、東北学院の副院長となつたホーイの推挙により、神学部の教授として旧約学を講ずることが内定してゐたらしい。

彌平は、「兼ねて東洋宗教の革命をなさん願望を有し」てゐた謹三を弟として信頼するだけでなく、「天稟性格思想學問等の實に於いては全く兄たるの資に乏

しからず素より小生の及ばざる所小生は常に同人を見ること兄の如く畏敬の念を」抱いてゐた。

けれども、謹三は明治二八（一八九五）年五月一五日に三〇歳の若さで急逝してしまふ。日清戦争に際して軍属として従軍し、営口民政支部で執務してゐた彌平は、その悲報を聞き、「此時小生の失望落胆心中の煩悶懊悩今こゝに筆紙に盡しがたく嗟乎我が事終れり天遂に我を捨てたりとまで嘆息」したといふ。

アジア復興・東西帰一の途は遠く、精神的な拠り所であつた謹三を失ひ、鬱屈した日々を送つてゐた彌平に智學の著作は大きな活力を与えた。「盲龜の浮木死中に活路を得たる」と思ひ、「故謹三の復生再來に出逢うたるが如き感に打たれ」た彌平は、明治四〇年五月二一日早朝に智學を訪ねたのであつた。

さて、智学に出逢ふ以前、彌平は宗教は政治に従属するものと考へてゐた。

元來、小生の東西歸一は政治的に之を爲さんとし、宗教の如きも只之を爲すが爲めの一方便一手段として之を用るの意に過ぎず。即ち、政治的は主にして、宗教的は從なりとの考に御座候。小生曾て想ふに、マホメットは西域に興りて東西を統一せんとしたる者、又、成吉斯汗は東部に興りて東西を統一せんとしたる者。均しく皆武力即ち政治を以て本據とし、宗教は其方便手段として之を用ひたるのみ。マホメットの回々教に於る、成吉斯汗の頼麻教に於る是れなり。政治的の主にして、宗教的の從なる已に斯の如き例あり。以て則るべしと。是れ小生二十餘年來抱持したる意見、又歩み來りたる進路にて御座候。

（原文は総ルビ。以後のものを含めて、句読点は引用者による。）

宗教を政治的効果といふ点から評価する視点、そこに（功利主義の立場から宗教を評価する）福澤の影響を感じるのは、筆者だけではあるまい。

けれども、政治的現実は自らの理想と懸け離れて行く。北清事変や日露戦争の結果について、「小生の豫期に齟齬して云ふに忍びざるものあり又何ぞ東西歸一の大句に於て大なる裨益と大なる發展を見る事を得んや、實に慚愧如何千萬の至りに候」と憤る彌平は、智学を通じて政治的現実以上の宗教的理想に目覚めた。

小生は實に誤り候。小生は實に主從の分を誤り候。小生已に此過誤あり。今日に至りて天を呼ばんとするの窮に逢ふも、抑も亦自得自然の結果ならん歟。然れ共、今、此の過誤を改め、主從の分を正して、老師の所謂宗教的に世界統一を謀らば、小生の志願も亦自から其間に成就せらるゝの時あらん。小生は斯く思ひ斯く想ひ來りて、脱然として闇黒を出でて、前途に一大光明の在るを発見するに至りたる者。是れ前に謂ふ所、盲龜の浮木死中の活路と申せしも此事にて、小生豈之を恩とし豈之を徳とせざらんや。

そして、その点に今まで気付かなかつたことを悔やんで已まない。

吁夫晩れたり。向きに小生をして老師の御著作に接する事發行の當時ならしめ、又更に、小生をして老師の御明教を知るを得る事二十餘年の前にあらしめれば、小生は已に前述の過誤に陥ることを免れ、無益の奮闘勇戰に貴重の時間と錢財とを消費せず、悲運逆境に徒らに心身を勞苦せしが如き愚を演ずることなく、或は尚ほ數歩を進めて、大に老師の御指導に由り、老師の所謂世界の統一なる一大理想を現實に遂行する一大戰闘場裡に馳驅して、多少の功績を擧げ得たりしやも知るべからず。小生は實に老師を知り、老師の御指導を奉ずる事二十年遲かりしを恨む者に御座候。

だが、失はれた二〇年分を取り戻すべく、彌平は日蓮主義を奉じて奮闘せんと決意するのだつた。

小生が老師に師事し、また兄事せんと欲する者は、情においてのみ然るにあらざるなり、實に道に於いて然るなり。こゝに謂ふ所の道なる者は、老師の御指示に由る日蓮主義なり。日蓮主義は、即ち世界の統一なり、教法を主とし、王法を從としたる妙法的世界の統一なり。若し、小生が此見解をして正を得たるものならしめば、小生は實に妙法的世界の統一日蓮主義の大信者大奉行者たらんと欲する者なり。

（姫路獨協大学講師）